

いつたいなに お 一体何が起きたのか、ケンにもマヤにも分かりません。二人は、真っ暗な世界にどん
す こ ん吸い込まれていきます。そして、ズドンと尻餅をついてしまいました。どうやらこれ
いじよう お 以上、落ちることはなさそうです。マヤは泣き出しそうなそんな気持ちを堪えて、ケンに
はな に話しかけてみました。

「ケン、ここは、どこかな？」

「わからないよ。」

ケンの声も震えています。

しばらくすると、だんだん暗闇に目も慣れてきたのか、まわりがうっすらと見えてきま
はる した。すると、遙かかなたでキラキラ光るものが見えてきました。そして、その光はゆ
うご っくり動いています。二人は立ち上がり、光の方へ走り出しました。

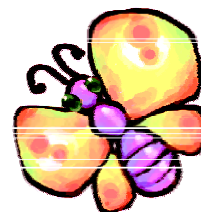
「何、これ！」

「さっき図鑑で見た蝶だ。」

おお おお ちょう 大きな大きな蝶はゆっくりと羽を動かしています。そして、穏やかな声で二人に話し
かけてきました。

「一緒に、冒険の旅にでませんか。」

「蝶が喋った～！」



マヤは腰を抜かしそうになりました。それなのに、昆虫好きのケンは目を輝かせ、嬉し
そうに、

「やった～！」

と叫んでいるではありませんか。そして、ケンは、一人でさっさと蝶の背中に乗ろうと
しています。一人残されたら大変と、慌ててマヤも蝶の背中に飛び乗りました。二人が
の 乗ったとたん、蝶はふわりと舞い上がりました。